

# ダルクにおける「回復」の社会学的検討Ⅱ（6）

——パネルインタビューからみる入寮者の変容——

浦和大学短期大学部 中村英代

## 1 目的

薬物依存への介入／支援は、「法による規制モデル」, 「医療モデル」, 「社会福祉モデル」にわけられるが(和田 2000), 覚せい剤事犯者の再犯率の高さや, 医療モデルに基づく治療の困難性が指摘されるなか, 薬物依存の当事者たちの自助組織であるダルク (Drug Addiction Rehabilitation Center) は, 薬物依存者の回復や社会復帰に一定程度の貢献を果たしている(松本 2005)。そこで, 本報告では, ダルクにおける, 入寮者の変容プロセスについて考察する。継続的なパネルインタビューから, ダルクで生活するなかで, 入寮者の行動や考え方がどのように変容しているのか／していないのかを明らかにする。

## 2 方法

7名の研究グループで, 大都市圏に位置する2つのダルク利用者 14人を対象にパネルインタビューを実施した。本調査では, あらかじめ仮説を設定することはせず, 継続的な聴き取り調査を実施することで入寮者の変容を追いかけた。質問項目は, その時々生活状況, 薬物の使用状況, 体調, 仲間との人間関係, 12ステップ・プログラムへの取り組みなどであった。本報告では, 報告者が中心的にインタビューを行ったYダルク入寮者のHさん, Iさんへのパネルインタビューを中心的なデータとして用いる。Hさんへのパネルインタビューは2011年9月から2013年4月までの計9回, Iさんへのパネルインタビューは2012年1月から2013年4月までの計8回実施した。

## 3 結果

パネルインタビューの結果, 入寮者には行動や意識の変容が確認できた。HさんとIさんは, ダルク入寮以降, 薬物(覚せい剤や咳止め薬)の使用がとまり順調にクリーン(薬物を使わないこと)を継続した。しかし, ダルクでの変容は, 薬物を使う状態から, 薬物を使わなくなる状態への移行だけではなかった。たとえば, Hさんは, ギャンブルの問題や, 片付けなど薬物以外の課題も自覚し, 取り組めるようになった。犯罪に関わってきた過去を持つIさんからは, ある行動を良い／悪いと思う基準の変容や, 他者に対する信頼感が形成されていく過程などが語られていた。逆に, 犯罪者としての加害者意識は今なお稀薄であるなど, 変容していない部分も語られていた。2013年6月現在, Iさんは就職が決まって円満退寮をし, Hさんはダルク・スタッフとして研修中である。

## 4 結論

彼らの変容を促す要因としては, 規則正しい健康的な生活, 1日3回ミーティングに出席することで自由な時間を確保できないこと, 元薬物依存者である先行く仲間が良きロールモデルとして機能していること, 仲間たちとの信頼関係の形成などが語られていた。薬物依存からの「回復」に向けた実践は, クリーンを続けることだけが目標にされているのではなく, 薬物使用へとつながる考え方, 生活習慣, 人間関係などを変容させていくプロセスであり, 継続的なパネルインタビューによってそうした実践の一端をとらえることができた。

## 文献

- 松本俊彦, 2005『薬物依存の理解と援助—「故意に自分の健康を害する」症候群』金剛出版。  
和田 清, 2000『依存性薬物と乱用・依存・中毒』星和書店。